

タイトル	モンゴルの詩学：創成と構築，その基本概念と体系を巡って ドロンテンゲル（満全）著
著者	テレングト，アイトル；TERENGUTO, Aitoru
引用	年報新入文学(16)：173(1)-146(28)
発行日	2019-12-25

一 基本概念

モンゴル語の「shuleg・詩・詩歌」という言葉は古代サンスクリット語の「シュルク・shuleg」という言葉を起源にしている。その意味について研究者の間ではさまざまな議論が交わされてきたが、その議論のなかで、例えば、「悲哀」や「悔恨」という意味を主張する学者（季羨林、バ・ゲレルト）がいれば、また、「メロディ」や「歌」だと唱える学者（デ・ツェレンソドナム）もいる。事実、その最も古い記録は、インド叙事詩『ラーマーヤナ』においてヴァールミーキ神が「シュルク・shuleg（詩）」を創出したという神話からきているのである⁴。このサンスクリット語のシュルク「詩」が最も早くモンゴル語において表出されたのは、『入菩薩行径釈』（1312）においてである。これがいわゆる、サンスクリット語の「シュルク」(詩) という言葉がモンゴル人の間に継承された最初の例証で、その原典釈義本としての『入菩薩行径釈』は、元の時代（1271～1368）の著名な翻訳家チョイジーオソルがハーンの勅命によって、白塔寺で命名して創出したという。この初めての「シュルク」(詩) が表出された文献において、モンゴル語の四行定型詩が定められており、それがチョイジーオソルによるものだと認知されている。

1. 詩学

詩学とは、アリストテレスの『詩学』（モンゴル語において「創作学」とも訳す）に由来する用語である。アリストテレスの体系を受け継いだ西洋の人文学において、「詩学」という概念は、詩学のみならず文学理論全般の意味でも使われているようで、とりわけルネサンス以降、詩学はしばしばさまざまな拡張した意味で使われるようになってきた。アリストテレスの『詩学』は、元来、アリストテレスの手によって構築された、主として悲劇それ自体に対するの分析

的な知のシステムであり、それがその起点からして明確な独立した分野として他の分野と区別されていた。いわば、アリストテレスの著作群において、詩学という概念は、とりわけ倫理学、哲学、政治学、修辞学、生物学などから明確に分離され、それが単独で一独立した分野として成立し、かつ叙事詩や抒情詩といったような当時から有するジャンルと一線を引いて、一領域として初めから十分に根拠があった分野であった。従って、詩学とは、その起源から他の分野と区分された、いわゆる作品それ自体に対する分析的な研究のことを指しており、しかも文学作品それ自体の研究を一個の独立した分野として成立させたのである。それが、正式にアリストテレスの時代からスタートしたものである。

現在、世界各国・地域・言語において、アリストテレスの「詩学」はしばしばいぶん拡張された意味で用いられているが、モンゴル文学においても同様、例外ではない。実際、モンゴル語の「詩学」という概念は、モンゴル詩学において三つの意味が含まれている⁵。① 詩学とは、詩歌についての理論を指す。すなわち、詩歌の意味概念、特徴、詩歌の象徴的な意味、詩の原理、あるいは詩のシステムについての研究のことをいう。例えば、ソユゲの研究『モンゴル詩歌学』において、詩学は詩の理論と同じ意味で用いられ、その詩学とは、詩それ自体の研究と、詩の創作と、詩の鑑賞に関する問題をターゲットにしたもので、それらを詩学の基本的な研究の範疇にしている。② 詩学とは、文学理論のことを指す。つまり、作品の意味、特徴、原理、役割、構成、あるいは文学作品の体系についての研究のことを意味する。例えば、バ・プリンプフ教授がその『モンゴル英雄叙事詩の詩学』の研究において「詩学とは、文学作品の理論的な総称である。それは、文学の本質、内容と形式、役割と目的、ジャンル・様式、創作原理などの研究によって規定され、それらによってその概念が構成されている」⁶という。③ 詩学とは、一般理論のことを指す。いわば、現在の言語的、文化的な状況において、詩学の概念が拡張しすぎてきた傾向にあり、

例えば、現在数多くの文化的な研究において、または大学教育においても、「文化の詩学」とも主張されるようになり、詩学それ自体が場合によって文化理論と同じような意味で使用されるようになってきた。そして、その文化の詩学とは、一種の文化的な流行りの現象となり、それが文化的な出来事や文化事業や文化活動でもありうる。従って、詩学とは、しばしば文化一般のことに対して一種の形式を与えたことと同様なことで、その理論に従って詩学的な解釈さえすれば、それで成り立つというわけである。本稿において用いる詩学の概念は、それらの拡張された意味を回避し、むしろ以上三点の定義において前者の二点の意味に限定したい。

2. 詩学の種類

実際、新時代におけるモンゴル詩学（詩の理論）は、その成果の数と質の面からみて、またはその内容の豊かさからみて大方高く評価され、研究者と読者たちを惹きつけてきた。その研究されてきた領域とジャンルによって、大まかに分けてみると、モンゴル詩学は、当面、四つのジャンルに分類することができる。

- ① 理論的詩学。ここでいう理論的詩学とは、詩歌の象徴的な特徴、特質、しくみ、体系、韻律型、創作に関わる基本的な諸原理などを取り扱うことであり、そのような研究範囲を一ジャンルとして理論的な詩学という。例えば、『抒情を求めてきた綴り』（バ・ブリンプフ、1984年）、『モンゴル詩歌学』（ソユゲ、2000年）、『口承文芸の創作理論——その歴史と方法』（チョグジンによる中国語訳、2000年〈John Miles Foley. *The Theory of Oral Composition: History and Methodology*. Indian University, 1988.））というような研究書は、理論的詩学に属する代表的研究である。
- ② テキスト分析の詩学。詩歌のテキストそれ自体を研究対象にしたものを

テキスト分析の詩学という。例えば、『モンゴル英雄叙事詩の詩学』（バ・ブリンプフ、1997年）、『口承叙事詩の詩学——アリムピルの（ジャンガル）の言葉のナラトロジーについての研究』（チョグジン、2000年〈中国語版〉）、『モンゴル語辞典——ジャムバルガーチラルからメタファーまで』（セチンバト、2006年〈中国語版〉）というような研究はテキスト分析の詩学の代表的なものである。

- ③ 歴史的詩学。歴史的詩学は二種類がある。一つは詩歌の歴史的な研究を指す。例えば、詩歌の発生、発展、展開、歴史的な進展の法則などを研究したものはそれである。もう一つは、詩歌研究についての歴史的な研究である。例えば、過去の詩歌についての研究や詩歌の評論の発展と展開についての研究である。例えば、『モンゴル詩学における美学の歴史的素描』（バ・ブリンプフ、1991年）、『モンゴル文学の理論的評論の歴史的研究』（バ・ゲレルト、1998年）、『モンゴル詩学の歴史的体系』（セ・オルスガル、2000年）、『評論の機能』（ドロンテンゲル〈満全〉、2002年）というような研究は、歴史的詩学に属す。
- ④ 比較詩学。それは世界各国と各民族の詩学の体系・詩歌の研究と詩歌の歴史的比較研究を指す。例えば、『イシバルジルの詩学研究』（ア・エリデンバヤル、2002年）、『法式善「呉門詩学詩話」についての研究』（宏偉、2006年〈中国語版〉）というような研究は、比較詩学の代表的なものである。

3. モンゴルの詩学

1902年～1914年、新疆のトルファンでドイツ考古学探検隊によって発見されたウィーグル・モンゴル文字の記録があるが、その記録によると、モンゴル人の詩の研究や、モンゴル詩歌に関わる研究は、遥か13世紀末14世紀頃からすでに始められていたという。それについて、チョイジーオソルの著作で論

及され、作者の生きていた年代、地域と民族の出身などについて詳細は不明だが、彼のモンゴル文学、言語文化に関する業績が多かったことは確かである（チョイジーオソルという名前は、「仏経の光」という意味で、その人物もその名に合致したように彼は元の時代の仏教研究者、翻訳家、言語学者、詩人でもある）。そして、彼についての記述はモンゴル語、中国語、チベット語の文献において散見されるが、しかしながら、それもわずか 1305～1321 年の間のものに限られている。彼はモンゴル語、中国語、ウィーグル語に熟通し、数多くの作品を著したが、残念ながら現存するものは少ない。当面、『仏祖釈迦牟尼十二行』、『入菩薩行径』（モンゴル語訳）、『入菩薩行径釈』、『聖五至尊大乘経』（モンゴル語訳、またセレブセンゲの訳ともいう）、『「聖五至尊大乘経」 跋詩』、『摩訶噶刺神頌』、『心籟』（蒙文啓蒙）など作品が伝承され、後世の文学作品創作と作品研究に対して多大な影響を与えてきた。例えば、『仏祖釈迦牟尼十二行』はモンゴルの喇嘛教僧侶たちの伝記のスタイルの底本になっており、『摩訶噶刺神頌』は 14 世紀の賛美歌の優れた模範本になっていた。『入菩薩行径釈』はモンゴル人の作品解釈の作法のモデルであり、詩によって詩を解釈するという方法の模範的なものとなっている⁷。

このように、モンゴル詩学は、その発展過程において、インド・チベットの韻律・音韻についての作詩法の影響を受けてきただけでなく、程度の差こそあれ、さらに古代中国の作詩法、また西洋の詩学の影響をも受け、そういったさまざまな受容された影響が融合されていくなかで、独特な特質をもつようになり、それらがモンゴル詩学の体系を構成してきたのである。

モンゴル詩学は、その概念として外延と内包を有する。その内包には明確なジャンルが含まれている。すなわち、モンゴル詩学にはモンゴル族の研究者と、モンゴルの詩歌（作品）の研究が内包されているが、そのモンゴル詩歌（作品や文化）の研究には、さらに詩人と、詩歌の批評（あるいは研究）と、詩歌の

歴史などに関する研究が含まれている。これらはいずれもモンゴル詩学に内包されているが、そこには二つの前提条件が必須とされる。つまり、研究者と研究対象のことで、研究者はモンゴル族の研究者であり、研究対象は、モンゴル詩歌として役割を果たすものであるが、この二つの前提条件に基づいて、モンゴル詩学の内包が定義される。例を挙げると、『モンゴル英雄叙事詩の詩学』（バ・ブリンプフ、1997年）、『モンゴル文学の批評史についての研究』（バ・ゲレルト、1998年）、『モンゴル詩歌学』（ソユゲ、2000年）は、代表的なものであるが、これらの研究者は、いずれもモンゴル族であり、その研究対象もいずれもモンゴル詩学に奉仕しているとみることができる。

一方、モンゴル詩学の概念には、内包されたもののほか、拡張された外延を有する。その外延には、① モンゴル族の研究者による他の民族の詩学（作品か文化）についての研究が含まれる。これらの研究者は、モンゴル族によって執筆され、研究され、その研究対象は他の民族の詩歌の役割・機能などについてである。例を挙げれば、ソユゲによって編集された檀丁の『詩鏡』（1986年）、あるいは檀丁著、ワン・マンタフによって編纂された『モンゴル語・中国語の二言語による詩鏡』（2000年）などのような業績である。これらはモンゴル族によって執筆され、研究されたが、それは他の民族の詩歌についての理論であり、いわゆる古代インドの詩学である『詩鏡』になるわけである。② 他の民族の研究者たちによるモンゴル民族の詩歌（作品か文化）についての研究も含まれる。すなわち、他の民族によって執筆され、研究されたものだが、研究対象はモンゴルの詩歌（ネイティブか非ネイティブによって創作されたものが含まれる）の役割などについての研究である。例を挙げると、ロシアの研究者C.Y. ニェキリョドブが著された『モンゴル人の英雄叙事詩』（1991年）、日本研究者蓮見治雄教授によって執筆された『「シリンの狂気の英雄」の語彙解釈』（2001年）、岡田和行教授によって著した『ポスト社会主義時代のモンゴル国

文学の伝統と刷新に関する研究』(2009年)などである。これらの研究は、他の民族の研究者たちによって執筆・研究され、研究対象はモンゴル族の英雄叙事詩やリテラシーとしての作品の役割や機能についてである。

二 モンゴルの詩学の知の起源

一般的に詩学の知の体系には、詩学の基本カテゴリーと概念、理論的システム、研究方法、論理的な思考の基盤が含まれるが、新時代におけるモンゴル詩学の知の起源については、二つの源泉があると考えられる。すなわち、モンゴルのオリジナルな伝統（ネイティブによる源泉）と、他者の伝統から受容された源泉である。

1. オリジナルな知、あるいは知のオリジナル化

現在のモンゴル詩学の知の体系では、伝統的な詩学の知が大半を占めている。そのなかで、モンゴルの古代詩学の知が現代モンゴル詩学によって継承されてきたものだが、それが伝統の継承だと称されている。

モンゴル古代詩学の知の体系は、三つのオリジナルなものから形成されている。その一つ目は、文芸的なもの、物語、鑑賞、芸術的なもの、壮大的・崇高なものなどのような諸概念に括られるが、それらはいずれもオリジナルなものに属す。そのモチーフは、主として文学的なものによって歴史を記録したり、抒情的なもので心情を表現したりする。その目的・作法においては、社会や歴史に対して申立を表明したり、あるいは倫理的哲学に基づいて十全な芸術的心情を表現したりする。二つ目は、インドとチベットから受け継いだ詩学の知のことである。すなわち、詩歌、伝記、玩味、修辞、無（無常）などのような概念、あるいはそれにまつわった、仏教を基盤にした体系的な知のことである。それ

が主として、韻律詩をもって仏を喜ばせ、詩作は言葉の音韻（メロディ）によるものだと定義されている。その作品のモチーフや積義的な批評の方法論は仏教の哲学に基づき、いかに喜びを生み出すことができるのかが、その詩歌の理論的な原理である。これらの詩学の知は、モンゴルにおいて仏教の信仰を広げ、文芸を繁栄させ、モンゴル詩学の知の体系を豊かにしてきた。三つ目は、中国古代詩学の知のことである。すなわち、詩歌、物語一般、鑑賞、神秘的なもの、気魄・風骨のあるものなどの概念およびそれらに関わる基本的なカテゴリーに属するもので、さらに創作方法に関する批評や、作品を用いて思想的「詩言志」を表現するものなどであるが、そういった詩歌の詩話・品詩・詞話の方法と、経典の教えや仏典の哲学に基づいた倫理や心構えに関する知の体系などは、いずれも中国の古代詩学に属するものであるが、これらの詩学の知識は中国とモンゴルとの文化的な交流を通してモンゴル地域で受容され、発展し、モンゴル詩学の知の内容を豊かにしてきたのである。

古代モンゴル詩学の知の起源について

分類	オリジナルな文芸の知	インド・チベット詩学の知	中国詩学の知
カテゴリー	文芸的なもの	韻律詩	詩歌
	物語	伝記	語り一般
	鑑賞	玩味	鑑賞
	芸術的なもの	修辭的なもの	神秘的なもの
	壮大的・崇高なもの	無や無常	気魄・迫力
モチーフ	文学による歴史・記憶の記録	文学を用いて仏を喜ばせるもの	文学を用いて義理を語るもの
	心情の表現	言葉の音韻	心情の表現
評論作法	社会的、歴史的な論評	積義的な論評	品詩、詩話、詞話
論理的な発想	倫理哲学	仏教哲学	経書と仏典の哲学

2. 近代における新たな知の融合

内モンゴルの近代詩学は、民族の古代詩学を伝承しながら古代西洋詩学とマルクス主義の詩学を受容して形成してきたものである。例えば、社会主義の実証主義、キャラクター・人物像、階級性、悲劇、喜劇、戯曲、風刺、マルクス主義的な文芸批評などのような概念は、いずれも西洋詩学によって基礎づけられて導入してきたものである。従って、西洋詩学の知は、内モンゴル文学において、三つの道を切り開いて入ってきたと言える。

- 1) ソヴィエト連邦（1917～1991）の多大な影響のもとで、モンゴル国の文学や文学理論・批評が凄まじい発展を遂げた。その成果が内モンゴル自治区に歓迎され、大量な紹介や転写訳（キリル文字からウィーグル・モンゴル文字への転写訳）が行われ、内モンゴル文学作品において受け継がれることになる。それはまず、1920年から30年代初期まで、モンゴル国の文学分野において民衆全体にわたって社会主義のリアリズム的な作品が普及し、20世紀30年代からソヴィエト連邦とヨーロッパのクラシック作品が大量にモンゴル語に翻訳され、モンゴル国の文学が劇的に変化し、豊かになってきた。例えば、プーシキン、ゴーリキー、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ニコライ・ネクラソフ、レイ・トルストイ、チャーホフ、ニコライ・オストロフスキー、デミテリー・フルマノフなど、くわえてまた、ヨーロッパで知られている大量のクラシック作品が次々とモンゴル語に翻訳され、それと同時に『翻訳文学』⁸が急速に発展して教育の普及と共に広がってきたのである。そして、19世紀40年代末からモンゴル国文学は、鮮やかな隆盛を見せてきたが、そのソヴィエト連邦文学、批評理論などは、この時期に、内モンゴル自治区に紹介され、内モンゴル近代文学の詩学が発展し、その分野を大いに豊かにしたのである。

2) 中国近代文学並びに文学評論などは、翻訳と紹介を通して内モンゴル自治区の文学分野にも受容されたが、それは主に、20世紀40年代から中国近代文学作品や文学評論がモンゴル語に翻訳され、内モンゴルの文学に受容されるようになった。さらにマルクス主義に基づいた文学理論を含む西洋詩学の知も中国語を通じて内モンゴルに移入される。

3) 20世紀前半、日本に留学していた学生たちは、日本語や日本文学を通して西洋詩学の知を受け入れたのである。日本に留学した内モンゴルの学生たち、あるいは日本で教鞭をとっていた教員たちは、日本文学作品を翻訳したり、あるいは日本語や日本文学を通して西洋文学や詩学を吸収したりして、その受容ぶりは凄まじく、その鮮やかさは、最近の研究において明らかにされている⁹。

以上で言及してきたように、内モンゴルの詩学は、インド・チベットの詩学、中国古代詩学、西洋詩学の知によって形成され、かつさまざまな形と複数のルートでモンゴル詩学において受容され、元来のモンゴルの伝統的な知と融合され、新たなモンゴル詩学のシステムを構築してきた。それがいわゆる内モンゴル詩学の独特な特質をもつようになった所以であろうが、複数の外来の知がネイティブの知に移植され、それらが再び融合のなかで繁栄してきたのが内モンゴル詩学の特徴である。

3. 外来の伝統の知

新時代の内モンゴル詩学の知の体系において、もし、時間の縦軸の流れにおいてネイティブの知の伝統が想定されるならば、そのほか、時間の横軸の流れにおいて異文化の知の伝統が存在するはずである。それは、つまり主として現代西洋のモダニズムとポスト・モダニズムを表象した詩学が内モンゴル自治区の文学者たちに新たな文学理論や研究視点と方法を与えてきたからである。例

えば、新時代のモンゴル詩学において、新しい言説空間が広がり、幅広い理解を通して新しい批評方法が応用され、新たな視点が導入され、あるいは新しい批評言説の構築などが盛んに進められている。それらは、いずれも西洋モダニズムか、ポスト・モダニズムの詩学の影響を受けているが、それらの思潮をも難なく受容している傾向がある。

三 合理的な知の基盤

アリストテレスの詩学の体系には、明らかにはっきりとした合理的・理性の基盤を有する。それに準じて、詩学一般を考察してみると、いかなる合理的・理性的な基盤、あるいは哲学的な基盤に基づいているかによって、その詩学の体系の性格が形成されているようである。とりわけ合理的・理性の基盤や哲学的な基盤が体系の礎となり、その思想的起源の構造が定められると考えられる。しかし、モンゴル詩学は、その始原的な思考に基づいてみると、大凡、宇宙と人間とは調和的で、作品と人間とも調和的だと考え、それと同時に、それはまた相反する両者で対立的でもあったと考えていた。そういうモンゴル詩学の礎によって構成された考えは、宇宙と人間との調和、作品と人間との調和を主張しながらも、また相反して、対立するものであり、それが一種の合理的・理性的なものだと考え、その調和と対立が基盤となっているが、したがって、モンゴルの詩学はその調和と対立によって構成されていると考えられる。

1. 宇宙と人間との調和

古代モンゴル人にとって、宇宙は万物の源であり、存在の起源でもあるが、宇宙はまた万物のあり方を定めて整える「第一者」でもある。生は宇宙から来たもので、いつか宇宙に戻っていくものでもある。宇宙の生成は生の生成であ

りながら、万物の生成でもあり、知の生成でもある。宇宙の変化は万物の変化に影響を与え、万物の変化が宇宙に影響を与える。従って、宇宙の法則は天の法則で、天の法則は人間の法則でもある。従って、人間の法則は、詩学の法則でもある。宇宙に対する、こういった認識と思考のあり方は、古代から現在まで伝承されてきたが、これが古代モンゴル人の世界観を規定しており、世界認識の基本的なあり方を規定している。

モンゴル詩学の作品研究においては、しばしば宇宙が万物につながるものとして表象され、その知の体系の一環として、詩歌の表現、テキストないし批評のあり方までも、宇宙・自然が機能しているが、その働きがするような場面は詩歌においても表出される。そして、詩歌の表現を含むあらゆる創作された文学作品には、程度の差こそあれ、始原的な形で宇宙・万物・生命の存在と生のイメージが表象されていると考えられてきた。したがって、文学批評は多くの場合、生命の批評かつ人間の批評であり、宇宙・万物の批評でもある。批評をするということの目的は、宇宙・万物・生命の存在をいかに理解し、整え、秩序正しく解釈するかにかかわることである。

従って、詩歌の法則・詩学は、人間の法則（詩学）であり、人間の学は天（自然）の法則に従っており、天（自然）の法則（学理）は宇宙の法則（原理）でもあると考えられている。

2. 作品と人間との調和

詩歌を用いて思想的な志を表現するという古代中国の詩学のモチーフの影響や、詩歌とは言葉の音韻（メロディ）というインドの古代詩学の影響によって、モンゴル古代文学作品において、二種類の精神的な様式（エートス）が形成される。それはすなわち、作者の精神的な気質・気魄・迫力を中心にした精神的なエートスに関わる認識と、作品の表現方法のあり方によって文体・様式に関

わる認識のことである。詩歌の文体・様式・エートスは、大まかにこの二種類の文体・様式・エートスに分けられていることが、最近の内モンゴルの詩学研究において裏付けられている。

実際、仔細に検証してみると、モンゴル詩学の様式・エートスは人間の様式・エートスでもある。詩歌の人間の様式・エートスは、その地域の自然風土の様式・エートスだと看做され、その認識はモンゴルの詩歌の様式・エートスの研究において一般化されている。それと同様、モンゴルの作者にとって、詩歌の様式・エートスは、人間の様式・エートスであり、人間のエートスは、その地域の自然の様式・エートスからくるものであるという。文は人なりというように、その人柄によってその人の詩を批評し、その人の立ち振舞によってその詩をなぞらえて読むのがモンゴル詩の研究のなかで少なからず見られる現象である。例えば、広々、晴れ晴れ、素朴、崇高、岩石のような表現は、詩人たちの意識の表出で、それが気質・気魄・心性に関係するエートスである。また、目、身、命、呼吸、心情、踵、迫力、風格といったような表現は、人間の身体に関係する表出でありながら、それは詩歌それ自体について命名することがしばしばある。従って、詩歌の様式・エートスは、人間のエートスであり、人間のエートスは、自然風土の様式でもある。

3. 二元論的な対立

モンゴルの文化的な起源や民間の口承文芸・伝説の起源において、二元論的に調和されながらも、また二元論的な対立の現象が多く見られる。例えば、天と地、父と母、黒と白、東と西、技法と天才、硬さと柔らかさ、硬直さと淑やかさ、尊崇なものと平凡なもの、正と非、上と下などのように、二元論的な対立が見られる。これはモンゴル人の始原的な発想の様式であり、宇宙・自然を認識する一つの方法でもある。従って、二元論的な対立は、つねにモンゴル

人の日常生活、習慣、感情、作品などにも表象される。そして、詩学において、それらは技法と天才に分類され、詩学の二元論的な構造だとみなすことができる¹⁰。

モンゴル人の詩の批評や歴史的語りの創作において、その方法は、二元論的な調和をとりながらも、相反した対立的思考様式を尊び、それが物語・伝説によく表象されている。例えば、英雄の国家と悪魔の国家、ハーンと兵士、男子シャーマンと女子シャーマン、良い方位と悪い方位、未来国家のシステムと過去の国家のシステム、太陽が登る方向と太陽が沈む方向、厳かな崇高な様式と柔らかくてかつしなやかな様式、叙事的なものや抒情的なもの、定型詩と自由詩、頭韻を踏むものと脚韻を踏むものなどのように、数多く対立的なものがあり、その対立的なことによって構成され、語られ、批評されている。

4. 研究分野において

中国全体の「改革開放」の政策が実施されてから内モンゴル自治区の詩歌の創作と詩学の研究は、急速に発展を遂げてきた。その研究分野のみを分類してみると、それは主として詩の創作、詩歌それ自体の研究、詩歌のシステム、詩歌の思潮的な流れ、詩の批評、詩学の起源・発展というような分野において研究が行われてきた。それらに関わる論文や研究書は現在も継続的に出版されている。

1) 詩歌の創作理論に関する研究

一般的に詩の創作において、程度の差こそあれ、一定の段階まで進んでいくと、人々は創作経験や教訓をまとめるようになるが、それが自然な傾向であろう。新時代のモンゴル詩学の研究も詩の創作の技法・経験が紹介され、それらがまとめられるようになり、ついに研究著作が著しく多く出版される

ようになってきた。そのなかで、とりわけ『抒情を求めてきた記録』(バ・ブリンプフ、1984年)、『直感の詩学』(バ・ブリンプフ、2001年)、『詩歌についての話』(アルタイ、2004年)、『怒りの思考の宴』(テ・スチン、2003年)などのようなものが代表的なものである。これらの研究は、国内外の詩歌の創作について、具体的な例に基づきながら、それぞれ違った方法、違った言説から詩の創作、詩人の教養、文化的環境、生活環境などを巡って、広範な領域にわたり、その諸問題を取り上げて論じてきた。例えば、ミメシス(模倣)、詩的境地、洞察、擬人化、暗示、インスピレーション、象徴、抒情的なもの、叙事的なもの、詩的言語、ホルボー(吟唱)・吟誦、政治的パッション、経験の蓄積、霊的なもの、悟り、連想、第二の自然、イマジネーション、様式(エートス)、民族の独自性、文化的伝統、異文化の影響など、多方面にわたって、多くの問題を取り扱い、それらを明らかにしようと努力してきた結果である。

2) 詩それ自体に関する研究

詩歌それ自体の研究、あるいは詩の構成についての研究は、詩学研究の中心的な課題であるが、18世紀からモンゴルにおいてすでに始まっていた。それはまずラマ僧侶によって編集された『賢明たるパラダイス』などの文献においてみられるが、モンゴルの詩歌それ自体の構成にかかわる評論が施されていた¹¹。ナ・サイシアルト教授の著した『モンゴル詩歌の韻律の研究』(1981年)や、それらに関する論文は、モンゴル詩の韻律についての問題を体系的に論じているが、とりわけ『モンゴル詩歌の韻律の研究』は、定型詩と自由詩との混合や、内容と形式の相互の影響などを分析して、モンゴル詩の韻律の構造を探求したもので、それは20世紀80年代のモンゴル詩の韻律研究として代表的な成果である。ソユゲ教授の上梓した『モンゴル詩歌学』

(2000年)と『モンゴル詩歌の理論的研究』(2005年)の二著作は、いずれも詩それ自体にかかわる問題を中心に研究したもので、とくに『モンゴル詩歌学』は、的確な分類を行なったうえ、幅広く豊富な例をもってモンゴル詩学の体系を考案することに貢献した。そこでは詩歌の内容、形式、詩的心状、叙法、インスピレーション、芸術的な心得、象徴、連想、共感覚、イメージ、語りの変異、詩の鑑賞などに触れ、詩それ自体の問題を取り扱っている。

3) 詩歌のテキスト分析に関する研究

新時代においてテキスト分析は、新しい研究方法として注目され、モンゴル詩の主要な研究分野になりつつある。テキスト分析によって成し遂げられた研究成果は豊富で、その方法は、文学理論、カルチュラルスタディーズ、社会・歴史評論など、さまざまな分野にわたって応用されてきた。とりわけ、テキスト分析の理論は、モンゴル詩のすべての時代の作法と技法の分析に応用され、モンゴル詩の思想的な体系、韻律、言語類型の諸問題を明らかにすることにより多く力を入れているのが顕著である。そのなか、『モンゴル英雄叙事詩の詩学』(バ・ブリンプフ、1997年)、『口承文芸の詩学——アリムピルの「ジャンガル」の語りの定式の研究』(チョグジン、2000年)、『知識人と一般人との対話——文化の変容における詩歌の象徴』(ドロントengel〈満全〉、2002年)などの研究が代表的なものである。

バ・ブリンプフ教授の著した『モンゴル英雄叙事詩の詩学』は、幅広い文化的な視野からモンゴルの英雄叙事詩のテキストを分析し、モンゴル英雄叙事詩の詩学の体系を構築しようとしたもののなか、格別な成果である。その内容は、モンゴル英雄叙事詩の特質、天の構造、相反した矛盾対立的なイメージ・システムの存在、馬の特別なイメージ、人間と自然の神秘的な関係、英雄叙事詩の発展と文化的な変容、英雄叙事詩の想像力、類型・様式・文

体などの多くの問題を取り上げ、幅広く詩学においてそのそれぞれの意味を探求したものである。この研究は、モンゴル文学研究全体に広範な影響を与え、その内容は国内外のモンゴル英雄叙事詩の研究において最高レベルに達したものである。朝格金（チョグジン）の博士論文『口承文芸の詩学——アリムピルの「ジャンガル」の語りの定式の研究』は、幅広く世界の各地の口承文芸研究に及び、諸言語の叙述法の類型論を踏まえたとえ、モンゴル英雄叙事詩——アリムピルの『ジャンガル』の表現の音韻、言葉の類型と物語の構造を分析して、物語の定式（公式化）はモンゴル詩歌の生成の基本原型であることを明らかにした。その定式（公式化）こそモンゴル英雄叙事詩の生成・継承ないし読者を魅了する、そのすべての段階の鍵となることを論じ、定式（公式化）は、口承文芸の継承において欠かすことのできない中核的な要素だという見解を提示したのである。モンゴル英雄叙事詩の言語の定式（公式化）の研究は、該当の分野では初めての成果となり、今後の口承文学の研究において方向づけの役割を果たすに違いない。わたしの研究『知識人と一般人との対話——文化変容における詩歌の象徴』は、伝統文化と現代文化との対話、他文化と知識人文化との対話、郷土文化と他文化との対話に焦点をあて、モンゴル現代詩において、ラディカルに表象された独自の特質の始原的なイメージ（始原的なモチーフを含む）——石、剣、鷲、水、馬、四季など六つの用語を根源的なイメージとして解釈し、それらが現代文化のシステムのなか、どのように表象されているか、その原像と変容の意味を明らかにしようとしたものである。この研究は、モンゴル詩学において初めてのカルチュラルスタディーズの視点を導入したもので、現代詩の意味を分析し、かつ現代文化のシステムの起源における意味・イメージないし原像の変容の過程を検証した努力の賜物である。

4) 詩歌の思潮に関する研究

モンゴル詩歌の思潮の流れに関する研究は、近年、研究者に重視され、関係の論述・著作数が増えている。そのなかで、『モンゴル詩歌の美学における歴史的概観』(バ・プリンプフ、1991年)、『新時代のモンゴル詩歌における近代化の思潮・流派』(ハイルハン、2003年)などの研究は注目すべきものであろう。バ・プリンプフ教授の『モンゴル詩歌の美学における歴史的概観』は、美学の視点からモンゴル詩歌の美的価値観、美的感受性の思潮的、歴史的な動態を概観したものである。そこでモンゴル詩の美学史において、モンゴル英雄叙事詩の詩作、厭世主義的な詩作、民主主義的な思考の詩作、社会主義的な詩作という四つの思潮が栄枯盛衰を遂げて変容してきた過程と呈示し、その手掛きは鮮やかである。ハイルハンの博士論文『新時代のモンゴル詩歌における近代化の思潮・流派』は、新時代の文学テキストを分析し、モンゴル詩歌における現代化の思潮・流派の成立・成長の過程、現代詩の心的状況、芸術的な定型などの諸側面に光をあて、新時代においてモンゴル詩歌の分野では現代化の思潮・流派がどのように形成されてきたかを明らかにしようとしたものである。

5) 詩歌の批評に関する研究

モンゴル詩歌の発展史において、他民族言語を用いて詩作し、他民族言語を用いて詩歌の研究を行うという珍しい現象が見られる。数多くのさまざまな資料によると、モンゴル人は元の時代から中国語やチベット語で作品を創作し、作品について探求をしていたという。近年、内モンゴルの研究者で、非母国語で詩作をし、他民族の詩歌の批評に注目して、自民族の詩学の領域を広めようとした研究者が現れている。例えば、ア・エルデンバヤルの博士論文『イシバルジルの詩学研究』(2002年)や、宏偉の博士論文『法式善「呉

門詩学詩話』についての研究』は、いずれも他民族の言語の詩歌についての研究である。

ア・エルデニバヤルの『イシバルジルの詩学研究』は、18世紀のスパンボ・ハンボ・イシバルジルなどの『如意宝璽』や『詩鏡（修辞学）入門』を中心に研究したものだが、その『詩鏡（修辞学）』は古代インド詩歌の理論家である檀丁の著作で、それがモンゴル詩学の理論的文献の起源の一つであるばかりか、古代のラマ僧たちの詩歌の研究の重要な内容でもある。なお『如意宝璽』と『詩鏡（修辞学）入門』は、ソンプ・ハンブ・イシバルジルのチベット語で書かれた『詩鏡（修辞学）』についての研究書でもある。その『イシバルジルの詩学研究』は、「序言」「チベット語のモンゴル語訳」「注釈」という三つの部分から成り立っているが、その内容としては、仏教、古代インド文化と歴史、詩学の名称、概念、カテゴリー、仏典、物語、ラシ神、人間の出来事、さらに修辞法、熟語まで注釈をしたのである。この研究は、初めて古代モンゴルの詩学の研究史におけるチベット語の詩学と、その詩学のシステムについて明らかにしたものである。

宏偉の『法式善「呉門詩学詩話」についての研究』は、注釈のかたちをとって『呉門詩学詩話』に関する詩学の概念、見解、人間の出来事について解釈を施したものである。著者の宏偉は清朝乾隆・嘉慶時代のモンゴル族の偉大な詩人かつ詩学者である。中国語でかかれた『呉門詩学詩話』の詩学の本について『法式善』を巡って中国古代詩の形式を応用した詩学の研究である。

6) 詩学の起源と発展に関する研究

モンゴル詩歌とモンゴル詩学の起源及びその発展についての研究は、モンゴル文学研究全体の重要な構成部分をなしているが、近年、それらの研究に関する論文や著作が数多く刊行されるようになってきた。そのなか、『モンゴ

ル文学の理論的論説の歴史的研究』(バ・ゲルト、1998年)、『モンゴル詩学の歴史の体系』(セ・ウルスガル、2000年)、『古代モンゴル詩作の起源と発展の概要』(ハスゴワ、1998年)などのような研究は代表的なものである。

バ・ゲルト教授の『モンゴル文学における理論的批評の歴史的研究』は、文化的な幅広い視野で、モンゴル文学の理論的批評の起源、発展ないし変容のプロセスを分析し、モンゴル文学の理論的評論の歴史的發展の大まかな流れを明らかにした。『モンゴル文学における理論的批評の歴史的研究』は、モンゴル文学の理論的評論の研究分野において、それは世界的なレベルに達した成果である。それはバ・ゲルト教授の長年努力の賜物で、まさに初心を忘れず忍耐強く40年間の持続的な研究の集大成である。その内容は、古代と現代との交錯、国内と外国との融合、郷土文化から発祥地の文化の構築に至るまでに展開し、その学術的思想や方法論は、幅広くかつ徹底して一貫しているのである¹²。

セ・ウルスガルの博士論文『モンゴル詩学の歴史の体系』は、テキスト分析と主体批評を組み合わせ、記憶の復元と現代的解釈を結合し、マクロ的制御とミクロ的分析を融合して、モンゴル詩学の起源、発展と変容の過程を整理して、モンゴル詩学の歴史の体系を構築しようとしたものである。ハスゴワの『古代モンゴル詩歌の発生と発展の概要』は、言語考古学的な視点からモンゴル詩歌の起源と発展の過程を細かく論じたのである。

こういった新時代のモンゴル詩学研究は、言うも更なり、その全体の展開と流れから見て、いくつかの中心的な要点がはっきりと観察される。例えば、① 詩歌の形式、韻律型の研究——本体論に属する研究である。これには主として、モンゴル詩の詩歌それ自体の研究によって代表されたものだが、それはシリーズ的研究になっている。② 詩歌の構造と言語定式の研究である。これは主として言語理論に属するものであるが、主に英雄叙事詩、吟唱

詩歌を中心にした一連の研究である。③ 詩歌や詩学の歴史的枠組，理論的体系の研究——いわゆる認識論にかかわる研究である。これは，詩人・詩作・評論・詩歌の歴史と詩学の歴史から行われた一連の研究である。④ 詩歌の思潮・美的感受性のあり方，文化的意味内容の研究——いわゆる認識論に属する研究である。これは，主として詩歌のテキスト研究を中心にした一連の研究である。

そして，模倣・分類・総括・解釈は，これらの詩学研究においていずれも一貫してその共通の研究方法であると言えよう。

5. 主要な成果

新時代のモンゴル詩学研究の歴史的過程を観察してみると，実り多く，直面した問題に対して，適切な視点からアプローチした結果，モンゴル詩学の体系は徐々にではあるが，そのシステムが形成されつつある。そのなか，主としてモンゴル詩歌の美学，構造的システム，象徴性，言語の定式などの面では突出して実り多く成果をあげてきたと考えられる。

- 1) モンゴル詩歌の美学の歴史的輪郭を明らかにしたものとして，代表的な著作は『モンゴル詩歌の美学の歴史的概説』(バ・ブリンプフ 1991年)であろう。これはモンゴル詩歌の美学の歴史的概略に基づいて四つの段階によって分類したものである。すなわち，英雄叙事詩を代表にしたヒロイズムの詩，仏教経典の詩歌を代表にしたペシミズムの詩歌，吟唱物語と近代的な詩によって表象された民主主義的な歌，現代の抒情詩によって表象された社会主義的な詩，という四つの段階によって分類されたものである。モンゴル詩歌の美学における四つの段階の分類法は，現在，学術的研究分野に認められただけでなく，研究者の間で幅広く応用されているのである。
- 2) モンゴル詩学の構造的システムの構築において，代表的な成果には，『モ

『モンゴル文学の理論的評論の歴史的考察』(バ・ゲレルト, 1998年), 『モンゴル詩学の歴史的体系』(セ・ウルソガル, 2000年)がある。バ・ゲレルト教授は『モンゴル文学の理論的評論の歴史的考察』において、モンゴル民族の文学理論は、大方三つの機能的な源泉によって構築されたことを明らかにした。具体的には、① 三つの外来の機能的な要素から構成されたことである。それはつまり、中国文芸とインド文芸とチベット文芸はモンゴル文学の理論的評論の源泉となり、それらが源として役割を果たし、構成され、定着してきたのである。それらの外来文化(異文化)は既存文化(郷土文化)の衝突・影響・融合されると共に、その歴史的過程を通じてモンゴル民族の文学理論が構成されてきた。その例証は自己民族の歴史・文化によって裏付けられていることで、きわめて説得力がある。② 三つの言語が機能して構成されている。つまり、古代モンゴルの作家たちは、主としてモンゴル語、中国語、チベット語を用いて文学理論に関する作品を著していた。③ 三つの思想的なシステムの影響のもとで構成されてきた。すなわち、古代モンゴル作家の学説と、漢籍道教の学説と、仏教・チベットの学説との思想的な影響を受けてきたことである。④ さらにその三種三様の創作と構成によってモンゴル文学の文体が形成されたのである。バ・ゲレルト教授の分類したところからみると、始原の時期からモンゴル人の作家たちは、三つの大きな領域に関わって創作し、作品を著してきた。つまり、チベット語を用いる作家たちには、チョイジーオソル、ロブサンピルレ、ソンバ・ハンボ・イシバルジル、チャハル・ゲヴシ・ロブサンチュールドム、アクワンタツタル、アクワンドンビドなどのようなラマ僧侶が代表的であるが、中国語を用いる作家たちには、サトラン、蒲松齡、ファッション、ナソンリンブ、シウエンなどが代表的である。そして、モンゴル語を用いる作家たちには、ハスポ、インジンナシ、フンヌチュグ、アルナ、

ロブサンチョイドンなどが代表的である。⑤ 三種三様の文学的な考え・趣向によって構成されてきた。パ・ゲレルト教授の考えによると、モンゴル文学の古代評論の成立過程において、三種類の文学の考え方・趣向によって構成された。すなわち、喜びや賛美を醸し出す趣向と、精神的心性を表現する趣向と、全体的・十全的・芸術的趣向がモンゴル文学の独自の特質を構成し、長い歴史的過程のなかで体系化されてきたのである。パ・ゲレルトによって提唱された三つの源泉によって構成された学説は、みごとにモンゴル文学の理論の独自性を歴史的に体系化し、適確に闡明されたところ、研究者らに著しく注目されている。セ・ウルスガルは『モンゴル詩学の歴史的体系』において、モンゴル詩学を四つの発展段階として分類する。初段階（14世紀～18世紀）、『詩鏡』を中心にした発展段階である。第二段階（19世紀）、詩歌法則の研究を中心にした段階である。第三段階（20世紀初め）、韻律学を中心にして展開した段階である。第四段階（20世紀）、共通の理論を中心にして展開した段階である。

- 3) モンゴル詩歌の元来の韻律についての研究において、代表的な成果は『モンゴル詩歌学』（ソユンゲ、2000年）である。この研究は韻律の理論、創作の理論と批評の理論という三つの部分から構成され、とりわけ、そのモンゴル詩の韻律についての研究は、初めての着想であり、多くの研究者に注目されている。
- 4) モンゴル英雄叙事詩の言語の定式において、その代表的成果は『口承文芸詩学——アリムピルの「ジャンガル」の言葉の定式研究』（朝戈金、2000年）である。これはモンゴル英雄叙事詩の言語の定式、修辞学的な伝統、言葉の定式化の類型、システム、機能などに分け入り、千年にわたって吟誦されてきた英雄叙事詩の秘密を明らかにしようとしたものである。したがって、これは英雄叙事詩ばかりか、さらに口承文学一般の伝承

についての研究に対しても新しい時代を切り開いた成果である。

結語

モンゴル詩学の研究は、新時代において華々しい成果をもたらし、モンゴル文学全体の研究にとって積極的な役割を果たしたのである。しかし、直面している問題も少なからずあることを認めざるを得ない。例えば、研究方法、詩歌の修辞学から文化の修辞学、オーソドックスな典籍による詩学と非典籍的な詩学についての研究など、問題はまだまだ多く残っている。とくに、現代の急速な社会的な変化に伴って、詩歌の多様化と創作の多様化に対して、詩の研究は人々の関心から少しずつ離れていることも事実であろう。それは複雑な背景と理由によるものだが、例えば、異文化の影響に晒されていることと、詩歌に興味をもたらすような活動が少なくなってきたこと、また個人的な詩歌の創作と社会全体の興味との乖離といったような現象が現われており、いずれも文学それ自体で解決できるような問題ではない。

しかし、その一方、実りのある興味深いことだが、新時代の文学——インターネットにおいて詩歌・文学創作が盛んになりつつある。それによって多くの読者がインターネット上の詩歌に興味をもち、新しい媒体での詩歌の創作によってモンゴル詩歌の分野においても華やかな時代が迎えられているようにも見られる。確かに、モンゴル人は実に詩的な素質のある民族であることがそこからも読み取れる。

[注]

- 1 ドロンテングル (満全)「モンゴル詩学——創成と構築, その基本概念と体系を巡って」『継承・創成・構築——モンゴル文学ジャンル学に関する諸問題』内モンゴル人民出版社, 2015年 (3~24頁)。
- 2 ドロンテングル (満全) 文学博士, 中国内モンゴル自治区師範大学教授, 内モンゴル自治区作家協会主席, 中国哲学社会科学優秀人材と国家文化名人 (2018年) に選出される。著書には『モンゴル文学体系研究』(モンゴル語)『零細と体系』(中国語)『モンゴル文学学科史——整理と分析』(キリル・モンゴル語)『モンゴル文学』(日本語) など20部ほどの学術研究書を著し, 中国のモンゴル文学研究分野において第一人者である。
- 3 訳者 (内モンゴル師範大学客員教授2019.3) は, 内モンゴル師範大学モンゴル学院でのシンポジウムや学術的ディスカッションにおいて, 複数の領域にわたって一つの問いかけ——「西洋の人文学は東洋において, いかなる普遍性と妥当性を有するか」——に繰り返し遭遇してきたものである。本論文は, そういった問いかけと問題意識のもとで選出し, 日本の関係領域の研究者と共有することを期待して訳出したものである。
- 4 季羨林訳『ラーマヤナ』(第一巻) 人民文学出版社, 1980年 (17-26頁)。
- 5 ソユゲ『モンゴル詩歌学』内蒙古大学出版社, 2000年 (55頁)。
- 6 バ・プリンプフ『モンゴル英雄叙事詩の詩学』内蒙古教育出版社, 1997年 (1頁)。
- 7 ドロンテングル『モンゴルの書写文学の基本的な約束』遼寧民族出版社, 2002年 (253~254頁)。
- 8 ホルロー, ロブサンワンダン, モンコ, チャント編『モンゴル国の近代文学の概略史』内モンゴル人民出版社, 1985年 (67頁)。
- 9 例えば, セレン著『受容の視野における20世紀モンゴル文学の理論的言説』内モンゴル人民出版社, 2007年。内田孝「<新モンゴル>誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動」『北東アジア研究』島根県北東アジア地域研究センター, 2008年3月 (第14・15合併号)。
- 10 ドロンテングル著「バ・プリンプフの詩歌の抒情性の種類——作法と天才の融合」『中国モンゴル学研究』2001年1月。
- 11 リンチンカワ, スチンチョクト編集『賢明たるパラダイス』内モンゴル人民出版社, 1983年 (16頁)。
- 12 ドロンテングル (満全)「モンゴル族の文学理論のジャンルの構築者——バ・

ゲレルト教授の文学理論研究についての注釈』『創作評壇』(2005年, 第3号)。

